# 教職「総合演習」から「教職実践演習」へ

## ―「総合演習」の成果をてがかりに―

益 田 亮 英

To "Practical Seminar for the Teaching Profession" from "Comprehensive Seminar": with a Clue to the Achievements of "Comprehensive Seminar"

Ryoei Masuda

## 1 はじめに

「総合演習」は、1997（平成10）年の「教育職員免許法の一部を改正する法律」の施行に伴い導入された科目であり、教職に関する科目の必修科目として、教員免許の取得を目指す学生は必ず学習することになっている。

免許法施行規則の第６条の別表の備考では、「総合演習は、人類に共通する課題又はわが国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする。」[1]としている。また、教職科目の趣旨等の説明の中では「人間尊重・人権尊重の精神はもとより、地球環境、異文化理解など人類に共通するテーマや少子・高齢化と福祉、家庭の在り方など我が国の社会全体に関するテーマについて、教員を志願する者の理解を深めその視野を広げるとともに、これらの諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようにするため。」[2]とある。

「総合演習」の目指すところは研究の成果のみを求めるのではなく取り組みの手順、課題発見、解決への段取り、対外交渉能力の育成、プレゼンテーション、目標に向かって他者と協力しながら取り組む組織の中でのリーダシップやメンバーシップの体験を通して「総合的な学習」等の指導に対応できるような能力を身に付けることにあると考えられる。2010（平成22）年度入学の学生からは「教職実践演習」[3]が実施されることになっており、「総合演習」は教職の科目から消えることになるが、「総合演習」実施後の学生の感想を基に「総合演習」の成果を検討し、「教職実践演習」への発展的な指針としたい。なお、本稿の趣旨から各テーマの研究の内容や成果については触れない。

## 2 授業計画

「総合演習」15週の授業計画は以下のとおりである。受講者60名を３つのグループに分け、各グループに教員を配置しグループでは４～５名の学生で班を編成した。１、２週の説明、班編成、

テーマ決定の後は各班が自主的に活動した。

| 週 | テーマ | 内容 |
|---|---|---|
| 1 | イントロダクション | 本講の目的、評価方法、授業の方法を説明し３（A、B、C）グループに別ける。 |
| 2 | 各グループの学習方法 | 担当教員による説明と研究課題の決定、役割分担、討議 |
| 3 | グループ調査(1) | ゼミ形式の演習 |
| 4 | グループ調査(2) | ゼミ形式の演習 |
| 5 | グループ調査(3) | ゼミ形式の演習 |
| 6 | グループ調査(4) | ゼミ形式の演習 |
| 7 | グループ調査(5) | ゼミ形式の演習 |
| 8 | グループ調査(6) | ゼミ形式の演習 |
| 9 | グループ調査(7) | ゼミ形式の演習 |
| 10 | 調査報告とディスカッション | Aグループの発表と、それに関する討議 |
| 11 | 調査報告とディスカッション | Bグループの発表と、それに関する討議 |
| 12 | 調査報告とディスカッション | Cグループの発表と、それに関する討議 |
| 13 | リポート作成 | |
| 14 | リポート作成 | |
| 15 | まとめ | まとめ、評価 |

## 3　班編成とテーマの設定

免許法施行規則の趣旨からすると、総合演習のテーマは人類に共通する課題又はわが国社会全体にかかわる課題であって、幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものであるが、専門的な学習の領域をさらに深める意味合いと、個人としてでなくチームとして取り組むことによるコミュニケーションの重要さを体験させることを意図して、基本テーマを与え班を編成した。実社会では好きな者がチームを組むことは稀であり、与えられた人間同士がチームとして課題に取り組むことになる。ここでも、名簿の順に４～５名ずつの４班編成とした。基本テーマとして、幼稚園教諭希望者には「子育て支援に関すること」、中・高教諭免許希望者についてはそのほとんどが教科英語の免許を目指しているため「小学校外国語活動に関すること」を与えた。

基本テーマ設定の理由は、以下のとおりである。

(1)　学習指導要領の改訂で小学校に外国語活動が導入されることになったが、小学校現場において職員の戸惑いは多くその実施に向けては不安を抱いている。外国語教育の実態を知ることが英語教師を志す者への視座を与えると考えられる。

(2)　少子高齢化、核家族化、地域におけるコミュニケーションの低下、ネグレクトや幼児虐待等の問題が山積している中で、若い母親の子育て不安解消に向けて地域ではさまざまな取り組みがなされている。地域における子育て支援の実情を知ることが幼児教育者としての視野を広げることになる。

各班ごとに、リーダー及び各係の選出の後、具体的なテーマの決定と調査研究の方法やアプローチについて話し合った。具体的なテーマは各班で検討した結果下記のとおりとなった。

| 班 | テ　ー　マ |
|---|---|
| A | 児童館の役割(熊本市立清水児童館の活動を参考として) |
| B | 熊本県宇城市不知火町における子育て支援の実態と課題 |
| C | 熊本県菊池郡菊陽町における小学校英語指導の実態 |
| D | 外国における小学校外国語指導の状況 |

## 4　取り組みの実態

「総合演習」の特徴はフィールドワークであり、学生自らの足を使って調査研究を進めることにあるため、講義時間外での活動が主となり、講義時間はグループごとのデータの検討やまとめに当てられた。現地調査や訪問は学生の授業時間の空き時間を利用して実施することになったので互いの連絡調整と訪問先との調整が大変であった。グループによっては全員で行動できるところもあったが２、３名ずつチームを組んで、あるいは個々人が取り組んでデータを持ち寄り対応するなどそれぞれ工夫を凝らして実施した。さらに調査研究した内容を独創的で強いインパクトのあるプレゼンテーションに仕上げるか創意工夫を重ねた。

## 5　「総合演習」の学生の感想

「総合演習」の終わりに以下の項目で感想を求めた。

1)　テーマの目的は達成できたか。
2)　グループ研究における自身の取り組みとメンバーの協力についてどうだったか。
3)　前に踏み出すことや考え抜くこと、チームで働くことなどの「社会人基礎力」に関してどう感じたか。
4)　他のグループの発表から学んだこと。
5)　「総合演習」を通して大学生と社会とのつながりについてどう感じたか。

なお、いずれの質問も200～300字の記述式としたため、以下の感想はその一部抜粋であり全文ではない。

### 1)　課題の達成度について

テーマの目的は達成できたかという問に対しては、一人が判らないと言った以外、全員が達成できたと答えており、達成感･成就感を強く感じている。身体を動かすことから始まるフィールドワーク型の学習で充実感や満足感を感じている。

［主な感想］

・調査研究を進める中で新しい課題や興味が次々とでてきた。外からは見えないような問題点などが現場で確認できた。
・現場で自分たちが思っていた以上の話を聞くことができた。
・小学校での外国語活動を実際に見学・観察して、先生や生徒の様子や授業内容を見て課題や改善点を見つけだすことであったがこの目的のほぼすべてを解決できたと思う。
・授業に参加させてもらい雰囲気を体験できた。教材も見せていただくなど充実した研究であった。
・諸外国の英語教育のシステムを知ることができた。外国の取り組みは今後英語を教科として導入するうえで大変参考になると思った。
・外国の英語教育と日本の比較ができてよかった今後の方向が見えたような気がする。
・外国における英語の早期教育が能力検定のハイスコアにつながっているなどと気づくことが多かった。外国の英語教育の成果を具体的に発見できた。
・地域の子育て支援の実際、法的な根拠、実施上の課題など知ることができた。
・テーマそのものがハードルが低かったので目的は達成できたがもっと深く知りたくなった。
・調べたことをよりリアルにみんなに伝えることができた。
・目的は達成できた、しかし、学習を深めれば深めるほど新たな疑問が次々と湧き、全てを調べることができなかった。
・あまり関わらなかったので研究の達成度はわからないがプレゼンテーションはよく出来上がった。
・調査対象の児童館について今まで全く知らなかったが活動の様子がわかった。
・児童館が身近にあるのに存在を知らなかった。気楽に楽しめる素晴らしい活動をしていると知った。
・児童館の活動の内容を詳しく発表できたので他の学生が利用してくれることを望む。
・児童館は子どもたちの遊び場だけでなく保護者の交流や情報交換の場になっていた。
　また、親子の絆を深める場にもなっていた。
・さまざまな子育て支援事業があるとは知らなかった。
・就職の視野を広げることができた。

### 2) グループ研究における自身の取り組みとメンバーの協力について

共同作業をするということに対しては、チームワークがとれてスムースにお互いの意見を出し合いながら切磋琢磨して効果的な結果を出した班と、班員相互のコミュニケーションがとれずグループ活動としての成果に不満を感じている班とに分かれた。

「総合演習」はフィールドワークを前提としており、授業の時間割の枠や大学を超えたところの調査研究が大切である。その目標に向かって各人がそれぞれのスケジュールをコントロールして臨むかが問われるところであるが、今回は結果的に一致団結できなかった班が生じ、グループとしての機能がとれた班とそうでない班に二分した。

作業分担と連絡調整が上手くできた班は、時間外等に連絡を取り合って一緒に行動することが多くプレゼンテーションの原稿もみんなで取り組み共同作業で作り上げたという意識が強い。反面、班員相互の連絡が取れず、決められた時間と場所に集まらないまま一部の人間で調査研究を

進めた班では互いに不信感を抱いている。

［主な感想］
・小学校英語のボランティアをやっているので経験者としてグループのみんなを引っ張った。
・一人ひとりが積極的な意見出し合って毎週々々進歩した。
・班をグループに分けて取り組んだ時、考え方や捉え方の違いで、問題となることがあったが全員で話し合って解決した。
・アンケート集計などで遅くなった時みんなが協力してくれた。
・集まる日時を決めてみんなで協力して計画通りに進めることができた、この授業を通してメンバーとの仲を深めることができた。
・班員がそれぞれに責任を果たしてくれたので班長として満足している。
・班員と頻繁に連絡を取り合い、授業以外で何回も打ち合わせを行った。
・インフルエンザなどで休んだ人もいたがよくまとまって行動できた。
・授業時間外での活動が多かったのでメンバー同士の時間調整が難しかった。
・自分の話をするだけでなく、友達はどういうふうにとらえたのか、どう思ったのかなどを聴くようになった。
・班員相互の連絡が充分でなく班としての行動ができないこともあった。全員が集まることがなかなかできなかったので行き違いや誤解が生じた。
・数名で話し合っていると一人では気付かない点に疑問を持つ人がいて内容に深みが出てきた。
・５人のメンバー全員が揃うことが難しかった。
・施設を訪問する時、連絡しても集まらない人がいたので残りの者で頑張った。
・メンバー間の連絡調整がうまくとれずリーダーとして申し訳なく思っている。
・グループ内の連絡不足から十分な共通理解が得られなかった。

### 3)　「社会人基礎力」[4]との関連について

経済産業省では「社会人基礎力に関する研究会の中間とりまとめ（2006年１月）」[5]をもとに、「社会人基礎力」育成のすすめを示している。職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な力を「社会人基礎力」と名付けている。「社会人基礎力」は前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の３つの能力と、それぞれを３～６の12要素に分けている。「総合演習」も取り組みの手順、課題発見、解決への段取り、対外交渉能力の育成、プレゼンテーション、目標に向かって他者と協力しながら取り組むなどの体験を通して教師としての実践的指導力の向上を図る点では共通している。

今回の「総合演習」の学生の感想を「社会人基礎力」の要素に分類したのが次表である。

| | |
|---|---|
| 前に踏み出す<br>(アクション) | ・テーマが自分の興味と一致したので特に進んで現地調査などを行った。<br>・どんなデータが必要なのかを考えインターネットや文献を参考にまとめた。<br>・疑問を持ったらすぐに動いた。<br>・目標に近づくためになにをしたらよいかを考えることができた。<br>・空き時間を利用して、構成を考えたりパワーポイントなど積極的に取り組んだ。<br>・訪問先や関係者と積極的に日程交渉や調整をした。<br>・調べているうちに新しい疑問がいくつも湧いてきた。 |
| 考え抜く<br>(シンキング) | ・課題に興味ができて日常的に深く考えるようになった。<br>・外国における外国語教育について調べたが、日本と外国における英語の重要性の違いが判った。<br>・疑問点をさまざまな方法で解決するよう努めた。<br>・プレゼンテーションでは絵や写真などをふんだんに用いたり、現物を提示するなど分かり易く伝えるために工夫を凝らした。<br>・常に最後の発表をイメージしながら課題解決に対した。理解してもらうために説明の順序や写真や図などの工夫を考えた。 |
| チームで働く<br>(チームワーク) | ・班員で役割を決めたので積極的に自分の仕事に取り組んだ。<br>・班員相互の連絡が充分でなく班としての行動ができないこともあった。<br>・自分の話をするだけでなく、友達はどういうふうにとらえたのか、どう思ったのかなどを聴くようになった。<br>・自分の役割（存在）を自覚し欠席しないよう心がけた。<br>・自分が疑問に思ったことを自己解決しないで班で考えるようにした<br>・役割果たすために進んで行動しなければ回りに迷惑がかかるので責任感が身についた<br>・施設訪問に対してのアポイントメントのとり方を班員みんなで話し合った後に行ったので非常にうまくいった。<br>・「総合演習」はフィールドワークがメインと聞いていたが、班員相互の時間調整や相手先との調整がこんなに大変とは思わなかった。 |

### 4) 他のグループの発表について

他のグループの発表については、プレゼンテーションの方法に関して最も関心を示している。自分たちの学習した内容をどれだけ強いインパクトで他に伝えることができるか、パワーポイントの作成において負けたくないという思いが競争心を生み、創意工夫を重ねるなどチームワークをさらに強めている。

調査研究を深めている班の発表についてはプレゼンテーションが充実しており、質問に対する応答ぶりにも自信が生じていることもうかがえる。図書館やインターネットによる調査だけでなく、現場に足を運んだグループの発表にリアルさがあり説得力があることにも気づいている。

各班ともプレゼンテーションについては「総合演習」の学習のまとめとして強く認識しており、

他の班と違った価値観をつけた仕上げにかなり意欲的に取り組んだ。

［主な感想］
・自分たちの納得いくまで調査研究してある班は発表者の伝えたいという気持ちが伝わってきた。
・練習を重ねた班は声や態度にその成果が表れており聞きやすかった。
・他のグループの発表を聞いて、自分たちの発表をさらに分かり易すくするためにプレゼンテーションについて何度も改善を加えた。
・インターネットや図書館の資料だけでなく直接現場で研究した内容がリアルでわかりやすく迫力があった。
・スライドが様々で見やすいものと見にくいものがはっきりしていた。文字が詰めすぎていたり、タイミングが早すぎるとダメと思った。グラフや図、イラストを取り入れたスライドは見やすくわかりやすかった。
・３週にわたって発表があったが、１週目より２週目、３週目のグループと表現や発声などプレゼンテーションが向上した。
・実物を見せた発表はすごくわかりやすくイメージもしやすかった。
・何度か質問したが、どの班も質問への対応力が高く、満足のいく回答が得られた。先生を目指すものとして情報収集能力とそれをまとめ上げる責任感があると感じられた。発表態度もよく、聞き取りにくい声の人もいなかった。教師としての自覚ができていると感じた。
・発表を聞くことで世界が広がった感じがする。地域に密着した内容が多く地域理解につながった。
・調べたことをより多く伝えたいという思いを、より簡潔にわかりやすくまとめることが大切と感じた。

### 5)　大学生と社会のつながりについて

電話での言葉使いや訪問時の服装などにも心がけるなど、先方との信頼関係の構築から、大学生という社会人の１人としてどのような形でかかわっていくことがいいかなど、現地で学習することによって気がついたことが多いことがわかる。それぞれの社会施設を訪問して、社会全体がそれぞれの立場から教育に携わっている現実に気付いていることも伺える。各施設への訪問を機会に親しみを増し広く活動の場があることを発見したことがうかがえる。

［主な感想］
・社会の方々に協力してもらっているということを念頭に、約束の時間をしっかり守り、身だしなみにも気をつけた。
・今回の調査研究を通して施設を運営している職員が、現場で工夫をしながら精一杯取り組んでいる様子がわかった。
・保育士や幼稚園教諭として子育て支援を目指す者が、子育て支援の実態を知らなかったことに気付いた。今回の機会を契機に今後はいろんな形でつながっていきたいと思った。
・ある子育て支援センターでは絵本の読み聞かせを中学生が体験していた。私たちも教材作りや読み聞かせのお手伝いをしたいと思った。
・今回の訪問でいい関係ができたので今後は児童館活動のお手伝いをしたい。

・地域の施設の活動は大変専門的で奥深いと感じた。学びあいたい。
・小学校英語活動について小学校の先生が大学生ボランティアについて大変期待されていた。現場の先生方のサポートをやってみたいと強く感じた。
・小学校では外部の力を借りて外国語活動をやっていた、私もボランティアの１人になりたいと思った。
・アポイントのとり方、お礼状の書き方、話を聞くときの態度など多くを学んだ。
・さまざまなことを教えてもらい、学生は社会に支えられていることを知った。
・社会の即戦力となるためにも学生として学校や現場に関わり合いたい。そして若い力を発したい。

## ６　成果と課題

教育職員養成審議会は「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（平成９年７月）の中で、いつの時代にもいつの時代にも求められる資質能力、今後特に求められる資質能力を具体的に答申している。[6]

「社会人基礎力中間とりまとめ」でも述べられているが社会の構成員として自立した一人の人間（人間力）としては「社会人基礎力」は必要要素の一つにすぎず、人間性や基本的な生活習慣が確立されていること、基礎的な学力、専門的な知識などを備えていることが活動の基盤となると述べている。教養審の「教員に求められる資質能力」も文言は多少異なるが内容は同じである。また、同答申の中で「教員の職責にふさわしい資質能力は、教員養成のみならず教職生活を通じて次第に形成されていくもの」とした上で、養成段階の形成イメージとして『専攻する学問分野に係る教科内容の履修とともに、教員免許制度上履修が必要とされている授業科目の単位履修等を通じて、教科指導、生徒指導等に関する「最小限の必要な資質能力」（採用当初から学級や教科を担任しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力）を身につけさせる過程』[7]としている。

これまでの述べたアンケートの結果から学生は、教師としての資質能力の向上と、教師としての力量アップの必要性を感じていることがわかる。課題解決についても意欲と情熱が芽生えていることがうかがえる。社会の実態を垣間見ることができ、視野を広げていることも見られる。現段階で教師としての実践力が着実に身に付きつつあり力量形成の一助となっていると思われる。

今回の「総合演習」では、班としてのまとまった活動ができたところとできなかったところが半々になった。チームワークの成果を感じている班と、組織人として、組織の一人としての自分の仕事や役割についての責任感や意識が充分でなかったと反省している班ができたが、チームワーク、コミュニケーションの大切さを学んだことは評価できる。班のメンバーと授業時間外に連絡を取り合い現地調査など組織的に活動したことが新しい経験ともなっている。また、他の班の発表を良く聞き観察して自分たちの発表へつなげるなどの創意工夫がみられる。

大学以外の外部組織とのかかわりでも、簡単な電話のやり取りの中からでも、基本的なコミュニケーション要素（報告・連絡・相談・確認など）を学んでいる。

連絡・確認が必要なことを学んだ事例：
学生「○○について、お話を伺いたいのですが、A日とB日のいずれかがいいでしょうか。」
先方「どちらでもいいですよ。」
学生「わかりました。よろしくお願いします。」
＝＝＝ここで終わっている＝＝＝
学生はB日に行く予定であるが、先方にはそのことが伝わっていない。
A日になって先方からの電話で、連絡が不十分だったと知るなど、簡単な連絡や確認の一つ一つの大切さを体験することができた。

「さまざまなことを教えてもらい、学生は社会に支えられていることを知った。」という感想にもあるように、このような小さな経験の積み重ねが、実社会から学んだという思いになり、「総合演習」履修の満足度を高めている。

グループで討議しながら課題を発見し、その解決のためにインターネットや新聞で調べたり、あるいは直接地域の関係施設を訪問し見学や体験などを通して総合的に学習に取り組んだことは、教育基本法の精神である「社会全体がそれぞれの立場から教育に携わる」を肌で感じることとなった。

「総合演習」が「総合的な学習」の指導力の育成とは直接結び付けられてはいないが、総合的横断的な視点から取り組んだことは、「総合的な学習」の指導法の技術習得のきっかけ作りとしては大いに役立ったことは間違いないようである。しかしながら、半年間15回の講義の中でテーマの決定から調査研究、プレゼンテーション、他の班の活動との比較などを行うには時間的には無理があった。子どもの課題解決能力をはぐくむためには、教師に課題発見力、情報メディアの活用による情報収集と整理、プレゼンテーションなどの力が備わっていなければならないが、「総合演習」のフィールドワークを中心とした体験はその形成に大いに役立つと考えられる。

この「総合演習」は学生が地域の様々な機関から協力を得ることによって進行した。小学校については、先輩達が外国語活動のアシスタントとして、活躍していることもあって快く協力してもらうことができた。外国における英語学習については、本学のネイティブ教師や留学生にもお世話になった。地域の児童館や子育て支援センター、保育所にも快く協力をいただいた。

本学においては、小学校外国語活動の支援以外に各専門分野で地域と連携した多様な活動を活発に行っている。その成果は高く評価され信頼されている。そのような背景もあって今回の調査研究に快く応じてもらうことができたと思うが、今後は「総合演習」の展開においても、地域から大学生、大学生から地域へと相互作用することによって地域・大学（学生）の活性化をもたらし、学生の資質を高めるようめざしたい。

今回のアンケートによると学生は、調査研究の姿勢、外部との交渉、学生間のコミュニケーションのあり方、効果的なプレゼンテーションへの取り組み、他人の発表を聞く姿勢などさまざまな面で自らの成長を自覚し満足している。フィールドワークを中心とした「総合演習」の学習方法は決して新しい方法ではないが、教師として強く求められている問題解決能力を身に付ける科目として目的を果たしていると考えられる。体験を通して様々な発見をしていることは実践的な教育方法の効果であり魅力である。

各班がそれぞれのテーマにそって、小学校や児童施設などを訪問し見学あるいは参加すること

によって、実社会の状況を理解する学習ができた。このように実社会の活動についての視野を広げたことは、教師を目指す者にとって有意義な経験となったと思われる。また、そのようにして得た成果を他の学生に、より効果的によりインパクトのある発表として伝えるために、チームのメンバーと試行錯誤したことはプレゼンテーション技術の向上にもつながっている。ただ、時間割の授業時間の中では、それぞれの成果を持ち寄り調整する程度で、ディスカッションに必要な十分な時間が持てなかった。このことはせっかく調査してきたのに自分の意見が取り入れられなかったなどという消化不良気味の感想に表れている。次年度に向けては、これらの点を改良して取り組んでいきたい。

## 7　おわりに

「総合演習」は半年間のわずかな学習であったが、体験的な授業を通して様々な社会勉強をしたことは、学生自身が「生きる力」を培い、教師を志す学生としての力量形成の一助になり、指導力の向上につながったことは確かである。さらに、実地調査や体験を中心に他の要素とかみ合いながらスパイラル的に成長していると言える。

「総合演習」を学習した学生は３年生であり、今後「教育実習」をはじめいくつかの学習機会を持っている、「総合演習」の経験をいかして授業に臨み、教師としての資質能力の形成に努めてもらいたい。「総合演習」の学習は地域の好意的な協力なしには進められない、それらの好意を大切にしながら大学生の斬新な発想と若々しさが施設に活気を与えたと感謝されるよう取り組みたい。

「総合演習」は現２年生で終わる。その後は「教職実践演習」に変わることになっている。文部科学省が示した教職科目の趣旨等によると、『「教職実践演習」は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置づけられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。』となっている。

「教職実践演習」は教職に関する科目の履修や教育ボランティアなどの社会体験の履歴を「履修カルテ」に記録し、その学びを振り返りながら、教師力や実践力を養うことにあると思われる。「教職実践演習」を継続性を伴った総合的・体系的なものへ発展した科目として捉え、大学と地域のつながりを一層密にすることにより、外の力によって鍛えられ、たくましい実践力を備えた教職希望学生の育成ができるよう「総合演習」での取り組みを活かしたい。

# 注

1　教育職員免許法施行規則　第６条第１項別表　備考欄七

2　http://www.mext.go.jp/a menu/koutou/kyoin/1268597.htm
文部科学省「科目の名称例・教職科目の趣旨等」より

3　教育職員免許法施行規則　2009（平成21）年４月１日の改正により、「総合演習」は廃止され、「教職実践演習」が新設される。

4　経済産業省が産業人の人材確保の観点から、2006（平成18）年から提唱したもので、「前に踏み出す力（Action）」、「考え抜く力（Thinking）」、「チームで働く力（Teamwork）」の３つの能力（12の能力要素）から構成されており、「基礎学力」「専門知識」に加え、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力としている。

5　「社会人基礎力に関する研究会=中間とりまとめ」社会人基礎力に関する研究会　2006（平成18）年１月
「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」と社会人基礎力と定義し、自立した一人の人間として力づよく生きていくための大きな要素の一つとしている。」

6　「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第１次答申）」1997.7
教員に求められる資質能力

(1)　いつの時代も教員に求められる資質能力
教育者としての使命感、人間の成長、発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力。

(2)　今後特に求められる具体的資質能力
地球的視野に立って行動するための資質能力。
変化の生きる社会人に求められる資質能力。
教員の職務から必然的に求められる資質能力。

7　「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第１次答申）」1997.7
［参考図］教員の資質能力の形成に係る役割分担のイメージから